

放し、より広い「デザイン」の認識を植えつける結果となった。當時はデザインという言葉は洋裁の方面で使われていただけで、工芸分野での使用が一般化するのには第二次大戦以後だが、図案部ではこの改革の頃から盛んに使われ始めた。そして、生徒たちはデザインとは何かという新たな問題意識を持って勉強に取り組み、そこに戦後新しいデザイナーたちが活躍する基盤が作られた。しかし、新鮮な発想、現代生活に即応したデザインということに重点を置いた教育改革は良い結果をもたらしたとする意見に対して、改革以後、古めかしい指導法ながらも生徒に日本の伝統を深く学ばせることによって基礎的な力をつけさせ、それを土台にして各自新しい方向を開拓させるという島田時代の基本の方針が崩れたこと、あるいは生徒一般に巧緻な表現技術を欠く傾向が生じたことを批判する意見もある。

四、夏季休業中の教室使用禁止

昭和七年六月二十二日、和田校長は主任、理事、教授会議を開き、その決議に基づいて夏季休業中の生徒の教室使用を禁止することとし、同二十四日、各教員に通達した。例年、夏休み中は秋の官展出品を目ざす生徒たちが教室を借りて制作に邁進するのが常であったが、和田校長は前出の「かく信じ、かく行ふ」の主旨に基づいて断乎これを禁止した。これに関連して翌八年には「生徒心得」を改正し、生徒の展覧会出品を制限する措置もとられる。

⑨ 海野清の在外研究

金工科教授の海野清は、昭和七年六月一日、文部省より金工技術研究の為、満一年間フランス在留を命じられ、帝展審査を了えて十月十八日に東京を出発。同九年一月十四日に帰朝した。

海野清は海野勝珉の四男として明治十七年に東京に生まれ、早稲田大学法科中退後、同三十九年、本校金工科に入学。叔父の海野美盛（水戸派）と清水南山（加納派）に師事した。大正六年に本校金工科助手、同八年に助教に任ぜられ、昭和七年三月に教授となった。中野政樹「海野清・人と作品」（『人間国宝シリーズ 28 佐々木象堂／海野清／魚住為楽』昭和五十四年、講談社）によると「プロフェッサーと呼ばれるまで外国に行かないよ」とつねづね言っていた海野は、教授となった年に渡欧した。教授であったためにルーブル博物館、大英博物館、エジプト博物館等でも、一つ一つ手にとって調査研究することができた（海野重男氏談）という。滞欧中の足跡については未詳だが、目的は、フランスを中心に西欧の金属工芸の技法を研究することにあつた。彼は元来、水戸派彫金の正統な継承者で、特に毛彫の技法に秀でていたが、この留学により西欧技法を採り入れ、また技術面以外に、金属工芸の理論家としても完成されて行くことになる。帰国した年の帝展出品作品「青銀花器」は、胴の左右にスカラベを打出した鍔付、中央にロータスの花をあしらったもので、古代エジプト芸術の影響を強く受け、西欧の造型と日本の伝統技術がよく融合して新しい日本工芸の傾向を示したものと評価された。

⑩ 「天心岡倉先生」の寄贈